

口瞳

惑旅行

新潮社版

昭和五三年九月五日 印刷
昭和五三年九月一〇日 発行 定価九五〇円

迷惑旅行 めいわくりょこう
© Hitomi Yamaguchi,
Printed in Japan, 1978.

著者 山口 瞳 (やまぐち・ひとみ)

発行者 佐藤亮一

印刷 大日本印刷株式会社
製本 神田加藤製本株式会社

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一番地 (郵便番号 一六二)
電話 (編集部) 〇三―二六六―五四一一
(業務部) 〇三―二六六―五一二一
振替 東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さる。送料小社負担にてお取替えます。



迷惑旅行 道中案内

川の松永、海の靫

旅支度

この世はすべて迷惑

駅前ホテルにて

雪花の羽原川

11

天上黄沙の別府湾

少鰯大人のこと

ぼくたちの失敗

いきなりドロボ

少鰯の奉仕的精神

大字四浦八十戸

28

強風強雨、
稲取海岸

扁額上掲式

水難のこと

ちよつと厄介な話

それぞれの酒癖

大歓迎

灰燼に帰す

47

青梅、
御嶽は青嵐の中

続・灰燼に帰す

嫁の立場

焼跡の万年筆

冒険ダン吉、青梅へ行く

67

身構えるドスト氏

隠岐の島、西郷町中村湾

86

旅行鞆に何もかも

女房の裸は恥ずかしいか

松江の皆美館

一見宮様風のイマちゃん

なぜ床屋へ行くのか

北上川遡行記

104

花巻の梶山季之

五里の道が歩けるか

やさしい東北弁

人体結構とは

登米の川風

南部鉄瓶のこと

三浦半島、観音崎ホテル

122

喜びも悲しみも

百七十五万円分の色紙

岩の上の人魚

一本の肋骨から

火傷人の災難

不埒に付き網走行き

140

道中二無事で……

知^ち多^た半^{はん}島^{とう}、
篠^{しの}島^{じま}、

大^{おお}夕^{ゆう}焼^{やけ}

近況報告

パラオの配慮

秋になる前の秋

島へ

迷路のような島

伯父の足跡

新兵衛の活躍

一難去って、また

大失策

故郷への熱き思いは

夏の終りの娘たち

刑務所の大欠伸

若狹湾、満月、犬熊海岸

草鞋を脱ぐ

祇園の地藏会

民宿の人たち

蛸壺に小便

丹後の宮津で

183

赤穂の穴子、備前の蟹

だいたい同じ所

仇討のような

サウルフヒト

御崎海岸の夜

備前の狐

203

スキヤキ用の小鉢

父祖ふその地佐賀ちさが

塩田町久間冬野しおたまちくまふゆの

純毛の背広

山口くんちのツトムくん

農家の仕事

ガネオクレタノム

河豚戦争のこと

祇園のパラオ

旅装をといて

244

223

迷惑旅行

川の松永、海の軻かわ まつなが うみ とも

*旅 支 度

また、旅に出ることになった。ドスト氏と二人で——。
いや、今回は、できることならばゲストをむかえたいと思
っている。

そこで、第一回のことでもあるから、編集担当のバラオ
と一緒にいかないかと言った。

「あなたは一泊するだけでいい。時節だから、フグでも御
馳走しよう。広島県だから、カキでもいい」

バラオから何某かの小遣を貰って旅行するのに御馳走す
るもないもんだ。

「いやあ、とてもとても——」と、バラオが言った。「私
には絵は描けません」

「絵なんか描かなくてもいい。フグを食べていればいい。
それで気に入ったらずっといればいいし、厭ならすぐに帰
ればいい」

「ひやあ、とってもとっても——。とんでもございません。
二人で行ってきてください」

これよりさき、紀行文を書くからには、タイトルを決
めなければならぬ。私は『老耄藤栗毛』『風景画入門』



『ドスト氏とともに』『風流旅艸』『新々放浪記』『日本全国
乞食旅』『草枕いくたび』『偏軒旅日記』『二人旅絵師』『今
日も旅鴉』『みづゑ紀行』『篠懸の道』『水彩画上達法』『夢
は枯野を』『二匹の旅猿』『哀れ旅雀』『たびの空・うわの
空』『道中双六色鉛筆』『与話情旅道連』『旅立ちぬ、いざ』
『旅寝人間』『変奇館・最後の旅』『禿頭珍道中』『旅の恥は
描き捨て』『旅稼ぎスケッチブック』などを提示して、ど
れかを採用してくださいと言ったが、バラオは、それを見
もしないで、

「……いやあ、とんでもない、私なんぞ、ハッハッハ、題
をつけるのはそっちのほうがうまいから、ハッハッハ、ど
うぞ、いやあ、とてもとても、エッヘッヘ、どうかひとつ、
まあ、気をつけて、道中ご無事で、ヘッヘッヘ、お風邪を
召しませんが、題のほうは、まあ、どうにでも、ヘッ
ヘッヘ、そういうもんですから、では、私はこれで、エヘ
ンエヘン、あつちは寒いという話ですから、ウヘッヘッ
ヘ……」

と言いながら帰ってしまった。

それで、私たちは、イマちゃんを誘うことにした。イマ
ちゃんはお向いに住む人で、福山の出身で、ドスト氏の親
友である。だから、誘うと言うよりは連れていってもらう
と言ったほうがいい。イマちゃんは日展・日本彫塑会の重
鎮で、ヨーロッパへスケッチ旅行に行ったりする人だから、

とてもイマちゃんなどと呼ぶわけにはいかないのであるが、
ドスト氏がイマちゃんと呼ぶので、都合上、私もイマチャ
ンと言うことにする。

一月二十三日、日曜日の朝、九時半に家を出ることにし
た。九時半に迎えにくるようにタクシー会社に頼んである。
だから、私は八時半に起きればいい。

九時ごろ、あらかたの支度ができて、あとは髭を剃れば
いいと思っていると、玄関のほうで女房の声が出た。あら
マアとかなんとか言っている。

どうやら、私の家の前にイマちゃんがいたらしい。何か
の用で玄関をあげた女房と顔があつたようだ。こういうの
は、イマちゃんがウロウロしていたと言うべきか、ブラブ
ラしていたと言うべきか、あるいは様子をうかがっていた
と言うべきか、私にはわからない。多分、イマちゃんは、
ソワソワしていたのだろう。九時から九時半までという、
わずかな時間の過し方が、どうやっていいかわからなくて、
いったん、私の家の前まで来てみたのだろう。

「九時半にお迎えにあがりますから……」

女房の声が聞える。

風呂場で髭を剃っていると、また玄関のほうで声がする。
自動車の運転手の疾久が、もう来たらしい。

「九時半っていうんだけんど、会社で待っていてもしよあ
んめいし」

疾久はそのまま台所まで入ってきた。そこへ電話が鳴った。ドスト氏からであることが女房の声でわかった。こんども、あらマアと言っている。

「九時半という約束ですけれど、朝の九時半か夜の九時半か忘れてしまったんですって」

「ほんとに、みんな、しょうがないねえ。夜の九時半にここを出て乗るような新幹線があると思ってるのかね」

しかし、私にはわかっていて、ドスト氏の電話の意味は用意ができていて、いつでも出掛けられるということなのである。

「それじゃあ、疾久さん、ドスト氏を先にむかえにいつて、連れてきてください」

九時半より前に全員が集合して出発した。中央高速道路が完成して、私の家から東京駅まで四十五分あれば行かれる。ただし、それは道路が渋滞しない場合である。私たちは十一時二十四分の新幹線に乗ることになっていて、すなわち、約二時間の余裕をみているのである。

「水仙島というのがあるそうですね」

と、私が言った。

「水仙島じゃありません。仙酔島ですよ。ほんとうは山水島らしいんですがね、仙人が酔っぱらうくらいにいい景色というんで仙酔島になったらしいですね」

軀にかぎらず、広島県には、酒の「酔心」にみられるよ

うな酔の字を使った地名、旅館名、製品名が多いのである。

「しかし、あのあたりは鰐が多いんです」

「ジョーズの海ですね」

「いや、ヨイザメです」

こういうことを言うのはドスト氏である。

中央高速道路が雪になった。私は自分の家の雑木林に降りかかる雪を見ながら酒を飲むのを楽しみにしていた。それが、出発の日の朝になって雪になるのは、なんとも皮肉である。去年は、国立市には雪らしい雪が降らなかった。

「これじゃあ、関ヶ原は大変だ」

バラオはそれを心配していた。私も、二時間ぐらいの遅延は覚悟していた。

倅の住んでいるアパートの前で女房をおろしたが、それでも十時半に東京駅へ着いてしまった。私は大丸で二杯目のコーヒを飲まなければならなかった。

東京駅のプラットフォームには、思ったとおり、バラオが来ていた。彼は、むかし、南洋委任統治地といわれる島で生れたのである。そのせいかどうかしらないが、はちきれそうな頬をしている。一時、その頬が破れるのではないかと心配したが、最近落ちついてきた。

「初雪ですね」と彼は言った。「これは初雪じゃありませんか、エツエツエ」

それからまた少し考えて、ええと、たしか今年はまだ降

っていませんね、まだ降っていないとすると、これは初雪になりますね、初雪でいいですね、エッエッ、弁当でも買いましょうか、と言った。

「そんなことより、あなた、一緒に行きましょうよ。なにか都合の悪いことでもありますか」

「そんなことはありませんが、私なんか行っちゃって、まあ、道中ご無事で……」

「ふぐさし、ふぐちり、ふぐぞうすい。どうですか。行きましょうよ」

私はバラオの洋服の袖を引っばるようにした。日曜日なので彼は家に帰らなければならない。送りにくるだけではないかにも気の毒である。

「小田原あたりが大雪だそうです。では、私は、これで……エッ」

十一時二十四分発、百三十一便のひかり号は、五分遅れで東京駅を出発した。

*この世はすべて迷惑

バラオの情報の通り、小田原近辺でかなりの雪の降ったあとが見られたが、私たちの列車が通過する時には晴れていた。列車は遅れを取りもどすために、ひたすらに突き進

んでいるかのようであった。

富士山は今日も見えないと思った。私たちは食堂車へ行った。実際、雲は、まるで富士山だけを隠すようにして、すっぽりとそこを被^かつていた。

私が旅に出たいと思うようになったのは、ひとつには、旅に出ているあいだだけは酒を飲まないでいられると考えたからだ。酒と電話から逃れられる。それが私の何とも言いようのない悦楽だった。人は、旅に出たら酒になると思うかもしれない。しかし、ドスト氏と私なら、酒を飲まないで旅の夜を過ごすことができる。そういう夜が幾夜もあった。おたがいに戒めあって夜をやり過してしまふ。それに、ドスト氏は、彼の言葉を信用するならば、朝の九時半と夜の九時半がわからなくなってしまふように、昨晩も飲みすぎているのである。イマちゃんだって、飲まないほうがいい。

私は、ビールと野菜サラダとチーズを注文した。このビールは、三人で一本というつもりである。すなわち、タンブラーに一杯ずつである。こういうものは酒ではない。舌を滑らかにするためだけの役割を果す。ビールと野菜サラダというのは、いかにも取り合せが悪いようであるが、まず野菜サラダを遮^{しやう}二無^ふ二つめこんでしまつて、いくらかの満腹感を味わい、チーズでカロリーを補給するという魂胆であった（ああ、糖尿病でなければ、いちいち食事の際の魂胆な